大地に刻まれた歴史　　新宿歴史博物館 常設展示解説シート❶

新宿の縄文人

昔の人の顔を知るためには、色々な方法があります。

150 年前くらいまでなら、写真が残っている場合があります。それより前になると、絵に描かれた顔。江戸時代の殿様や、えらいお坊さんは肖像画に描かれ、現在にその姿が伝えられています。それよりももっと昔で、名前も伝わらないような人の顔は・・・？

展示ケースの中にいるほりの深い顔の男性、この人は今から約 5000 年前の縄文時代に新宿区内の市谷加賀町二丁目あたりに生きていた人の顔です。遺跡から出土した人骨をもとに復元した顔なのです。発掘されたときはバラバラだった骨を、パズルのように組み立て、その骨のレプリカに筋肉や皮膚を粘土で復元して作られました。生きていた当時はもっと髪もボサボサで、髭も生えていたでしょうが、頭やあごの形を見てもらうために、髪型はすっきりと結び、髭などは表現していません。

骨の特徴から 40 代で亡くなったこともわかりました。体の骨も残っていて、身長は 161 センチくらいと縄文人としてはやや大柄です。発掘された時の状況から推理すると、竪穴住居の中に両足をのばして葬られ、その頭には縄文土器がかぶせられ、イルカの骨でできためずらしい腰飾をつけていたようです。集落のリーダーだったのかもしれません。

5,000 年前というのは、平均 20 歳で子どもを産んだとして、今から 250 代前の人たちが生きた時代です。お母さんのお母さんの・・・と 250 回言ったらたどりつく人です。気が遠くなるほど昔ですが、たしかにその人がいたからこそ、今の私たちが存在しているのです。もしかしたらこの縄文人が自分の祖先にあたる人かもしれないし、祖先の知り合いだったかもしれません。そう考えると、親近感がわいてきませんか？

発掘された時の様子　　人骨から復元された顔